

ネットのいじめ見逃さず

県が「防止基本方針」策定



「県いじめ防止基本方針」を策定した会議。ネットパトロールをはじめ、いじめの未然防止などの対応を明確にした
=4月17日、県庁

県は4月、県内の小中高校のいじめ防止対策の基盤となる「県いじめ防止基本方針」を策定した。昨秋の「いじめ防止対策推進法」施行に伴う動きで、基本的施策としていじめの未然防止と早期発見、認知後の動き方を明確化。加えて、インターネット上でのいじめへの対応を個別に定めているのが特徴だ。

ネット上のいじめとは何れの教員の指導力向上を重め、具体的な事例を網羅した視した。早期発見のため、学校やPTAによるネットパトロールの徹底、未然防止のため、トロールの有効性も挙げて

日常生活の変化 即座に対応

具体的にはどのように機能させていくべきか。ネット上のいじめを研究している山形大基盤教育院の加納寛子准教授は、児童生徒にとって身近な保護者らの行動が鍵を握ると強調する。例えば近年の子どもたちの傾向から、ネットパトロールの困難さを指摘。「10年前であれば学校裏サイト、ブログなど外部から見るところに（いじめが）書いてあった。最近の子どもたちはセキュリティやプライバシーを意識している。無料通信アプリLINE（ライン）などを使い、親や先生を「ガードしている」と分析する。漠然とした監視では、いじめの手掛かりは見つからない。ではどうすれば端緒をつかめるのか。加納准教授は日常生活にヒントが隠されているとする。「朝は元気に登校したのに、帰ってきたら暗くなって何もしゃべらない。そんな場合はネット上に原因があるかもしれない。親が子どもの携帯電話を定期的にチェックする、先生が自分の児童生徒の（交流サイト）フェイスブック、ツイッターの書き込みを見る。毎日顔を合わせている人が、変化に気付いたら即座に調べることに意味がある」

子どもの様子を把握できる立場の人が実施してこそ効果があるネットパトロール。変化を感じ取るための他の手法として「例えば今は簡単にデジタルカメラで撮影できる時代なので、何らかの形で毎日子どもの写真を撮って子どもの顔をチェックする。今日と昨日の顔を見比べたら生活の変化が分かり、ちよつとでも違いを感じたら声掛けしていくことが大切」と提言する。

児童生徒一人一人の様子を注意深く見詰めることを前提に「昔は、子どもの様子が少しでもおかしかったら保護者に簡単に連絡が取れたが、通信手段が高度化した今は逆。家に固定電話がない家庭が増え、仮に携帯電話にかけても出なかったり、だいぶ遅くなってから着信に気付くケースもある」。県いじめ防止基本方針の策定そのものには意義があると評価した上で、形骸化させないために教育現場と家庭の連携を密にした初動対応が重要と指摘した。

▽身近な人が鍵

▽重要な「初動」

言われただけです